

学部・研究科名地域環境科学部

学部長・研究科委員長名大林宏也

学科名・専攻名森林総合科学科

1. 教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 講じている ☐ 一部講じている ☐ 講じていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☐ している ☒ 一部している ☐ していない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない
点検項目に対する 現状説明	現在の学科の教育・研究上の目的、教育目標、カリキュラムポリシーに基づき科目を配当している。	学科および各教員が協力して、最初に学習意欲を高め、徐々に専門的な教育へと展開している。 試験の結果や授業評価、授業中の学生の反応などをもとに、工夫を行っている。学外実習や実習施設の充実を学科や研究室で行っている。	教員が成績評価の基準、採点後の試験やレポートの返却、試験の答案例の明示などを行っている。	3，4年生は全員が研究室に所属し、学生と教員の距離が近いため、単なる知識、技能の習得のみならず、ディプロマポリシーの重視している「問題発見能力」、「問題解決能力」、「コミュニケーション能力」の習得レベルを指導教員が把握し、評価している。	現在の学科の教育・研究上の目的、教育目標、カリキュラムポリシーに基づき科目を配当している。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・学生は2年時末に研究室を選択し、3年時より各研究室へ所属し専攻演習を受講し、4年時の卒業論文へとつなげる。	【長所】 フレッシュマンセミナー等を活用し、興味関心を惹起し、学習意識を高める等の工夫をしている。	【長所】 教育の評価については、各担当教員が責任をもって実施している。実習科目については、初回にガイダンスを配し、基準についての説明をしている。	【長所】 なし	【長所】 ・学生は2年時に研究室を選択し、3年時に各研究室へ所属し専攻実験実習を受講し、4年時の卒業論文へとつなげる。
	【特色】 ・専門的な知識や技能の習得。他校には少ない2年間に及ぶ卒論指導。	【特色】 対面型の指導にオンラインによる指導を交え、個々の学生の特徴・状況に対応した指導を実施。	【特色】 なし	【特色】 なし	【特色】 ・専門的な知識や技能の習得。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・研究課題が細分化、専門化してきていて、学科全体の講義や実習との関連付けが必要。	【問題点】 コロナ禍への対処に加え、大学経営に関する業務負担等が多く、学内外での調査研究が十分には実施しがたい。	【問題点】 なし	【問題点】 教員各自の判断に任せがちであり、学科としての確認が不十分である。	【問題点】 ・研究課題が細分化、専門化してきていて、学科全体の講義や実習との関連付けが必要。
	【課題】 ・カリキュラムに基づいた効果の発揮や実習等への関連付けの確認。	【課題】 ・カリキュラムに基づいた効果発揮や実習等への関連付けの確認。	【課題】 留年・原級学生が比較的多いという現状に基づいた新たな工夫が必要。 学生の状況把握が必要。	【課題】 留年・原級学生が比較的多いという現状に基づいた新たな工夫が必要。	【課題】 ・カリキュラム改正後の効果発揮や実習等への関連付けの確認。
根拠資料名	現行森林総合科学科ポリシー 現行森林総合科学科カリキュラム CP・DP	オリエン手引き新入生、入学式時資料1、入学式時資料2 森林総合科学科研究室紹介	シラバス確認書類＊	シラバスに明記している。 現行森林総合科学科ポリシー 現行森林総合科学科カリキュラム CP・	現行森林総合科学科ポリシー 現行森林総合科学科カリキュラム CP・DP

				DP	
--	--	--	--	----	--

2. 学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	一般入試、共通テスト利用入試の受験生に対しては、大学案内、大学ホームページ、オープンキャンパス、学科パンフレットなどでアドミッションポリシーを公開している。また、指定校をはじめ、一般推薦入試の受験生を送り出す可能性のある高校には、出前授業や学校訪問を積極的に実施することでカバーしている。	学科の中高生応援実務委員会では、入学制の受験制度、出身高校などのデータを収集、分析し、指定校の見直し、学校訪問先の選択、学科パンフレットや学科 PR パネルなど広報資料の修正、作成を行っている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・研究室横断的に、多分野の教員が合同で検討して問題作成を行っている。	【長所】 ・入試時に、受験動機、学科パンフレットやキャンパス見学会への参加などについて確認をしている。
	【特色】 ・入試時にアドミッションポリシーを配布して確認をしている。 採点基準、面接項目は、事前に確認して実施している。	【特色】 ・なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・分野名変更を行い、研究室の分野体制を変更したので、具体的な指導体制を検討する。今後は、さらに同様の検討を進める。	【問題点】 ・障がいをもつ学生への対応を行っている。
	【課題】 ・分野名変更、研究室体制の変更に伴う具体的な方針の検討と確認をする。	【課題】 ・卒業生へのアンケートを分析して確認する。
根拠資料名	出題委員の選出資料＊ 小論文採点表、入試面接諮問記録など	AO キャリア入試小論文採点表、AO 入試面接諮問など 指定校の見直し＊ 学校訪問等の確認＊

3. 教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ つなげている ☐ 一部つなげている ☐ つなげていない	☐ 行っている ☒ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	学科の教育組織の編制方針のとおりであり、学科内で認識を共有している。より効果的な教育のために、将来分野の編成の変更を検討している。	分野、研究室の編制見直し、教員の配置や年齢構成、将来的な人事計画（昇格、新規採用等）などを拡大主任会等で検討している。	・任期制教員の面談と確認、 ・昇格に対する現状や希望の確認を随時行っている。 ・教員1名が任期制教職員から専任教員へと昇格。 ・新規教員の採用	・依命国外留学など中堅・若手教員の資質向上を図るための計画を作成中である。そのための分野・研究室教員間の協力体制も検討している。 ・1名が留学中 ・任期制教員に対しては、定期的に面談を行い、状況を確認している。	分野や研究室体制については、将来構想委員会などで検討している。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・学科の分野名を段階的な分野設定から視点や手法に基づく分野へと変更しつつある。	【長所】 ・学科教授会において、人事計画については検討している。	【長所】 ・学科教授会において、人事計画については検討している。	【長所】 ・若手教員が依命留学に行けるような体制を整えている。	【長所】 ・なし
	【特色】	【特色】 ・森林を取り巻く総合的なアプローチが可能である。	【特色】 ・なし	【特色】 ・該当する研究室の受け入れ学生人数を調整したりしている。	【特色】 ・なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 退職教員に対応した枠取り申請などが計画段階にあり、対応する必要がある。	【問題点】 ・人事体制のさらなる明確化。	【問題点】 ・教員の負担が多くなってきているので、全体で分担するように心がけている。	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・分野名の変更に伴う状況について、確認をする。
	【課題】 ・分野名変更、研究室構成変更に伴う新体制の構築	【課題】 ・具体的な人事体制を明確にする。	【課題】 ・教育業績だけでなく、大学や学科への貢献度や学生対応なども考慮する。	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし
根拠資料名	将来構想委員会資料 学科リーフレット A4 版、学科リーフレット改定版、教育懇談会資料	学科教授会開催＊	学科教授会開催＊	任期制面談記録＊ 海外依命留学資料＊	学科リーフレット A4 版、学科リーフレット改定版

学部名 地域環境科学部

学部長名 大林 宏也

学科名 生産環境工学科

1. 教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 講じている ☐ 一部講じている ☐ 講じていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☐ している ☒ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	カリキュラム・ポリシーに基づき、学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成している。 1、2 年次には分野共通的な科目を、学年の進行に伴い、分野・研究室を意識指させるような専門教育科目を配置している。	個人面談を定期的実施している。 また、教育点検委員会や各科目関連の検討委員会を設置し、効果的な教育を行うための措置を講じている。教員相互の授業視察を実施している。答案・レポート返却を実施し、復習させるように努めている。授業評価アンケート結果には所見を付すようにしている。	成績評価の方法や基準はシラバスに明記している。試験については正答の開示を行い、採点後の答案や添削したレポートの返却を実施している。また、学科共通的な科目の成績評価は、教育改善委員会で相互に確認を行っている。最終的な単位認定・学位授与については、教員会で判定している。	定期的に行う個人面談で学習成果の把握を実施している。面談では学生本人からの履修状況の申し出とともに、学生カルテ掲載の成績を利用している。 技術者養成コースの学生には学習目標達成度評価を行ってもらっている。	教育改善委員会は毎週、教育点検委員会、技術者教育検討委員会は月 1 回程度、教育システム評価委員会、非常勤講師懇談会は年 1 回開催し、定期的に教育課程及びその内容、方法の適切性を点検・評価し、恒常的に改善・向上に向けた取り組みを行っている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・分野・研究室・教員へと所属を細分化することで、専門教育への導入を緩やかに、かつ効果的に行うことができる。	【長所】 ・様々な措置により学生の学習意欲を高く保つことができる。	【長所】 ・学生が納得できる評価を行えている。 ・共通的な科目では教員間での極端な評価の差を解消できる。	【長所】 ・個人面談は学生の履修状況を把握するのに利用できる。 ・達成度評価は学生と教員による把握を容易としている。	【長所】 ・問題が生じた場合の改善策を迅速に議論し、改善への取り組みの着手が容易である。
	【特色】 ・工学的な専門科目を理解できるように理数系の基礎科目を配置している。	【特色】 ・定期的な個人面談、授業視察、答案・レポート返却など実施している。	【特色】 ・評価について科目担当教員以外の監視を受けている。	【特色】 ・個人面談を実施して対応している。	【特色】 ・教育システムに関して学外の評価を取り入れられる仕組みとなっている。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・低学年次に、学生が興味を持ちやすい実習的、現場体験的授業が少ない。	【問題点】 ・個人面談実施に応答しない学生や質問しない学生、答案レポート返却を受けない学生がいる。	【問題点】 ・答案の返却によって過去の試験問題が流出するため、授業全般に対して幅広く学習する姿勢が低下する可能性がある。	【問題点】 ・現在、達成度評価は技術者養成コースの学生のみ作成している。 ・履修モデルに従わない学生がいる。	【問題点】 ・点検項目には問題ないが、委員会が過多となり、教員の労働負担が過大となっている。
	【課題】 ・2024 年度カリキュラムでは、現場体験的な内容の授業科目を導入し、より実効性の高いものへと改善する予定である。	【課題】 ・学習意欲のまったくない学生への対応を検討していかなければならない。	【課題】 ・試験の出題法や評価の仕方を工夫する必要がある。	【課題】 ・全学生が達成度評価を行うように指導していく。 ・履修モデルに沿った履修を行うように指導を強化する必要がある。	【課題】 ・ルーチンワークとして実施できる部分は簡素化し、改善・向上への取り組みを実効性のあるものとする。
根拠資料名	カリキュラム・ポリシー (a1-①-1) 学科開設科目 (a1-①-2) カリキュラムツリー (a1-①-3)	学生状況調査(1 年) (a1-②-1)	ポートフォリオ内容一覧 (a1-③-1)	ディプロマ・ポリシー (a1-④-1) 学習目標達成度自己評価 (a1-④-2)	教育関連委員会関連図 (a1-⑤-1) 教育改善委員会議事録 (a1-⑤-2) 非常勤講師懇談会議事録 (a1-⑤-3)

2. 学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	本学の学生募集・入学者選抜には、一般選抜、大学入学共通テスト利用選抜（2科目型、3科目型、4科目型）の他、自己推薦型選抜、公募型選抜、特別選抜などがあり、自己推薦型選抜には、キャリアデザイン総合型選抜、高校で学んだ実践スキル総合型選抜、東京農大ファミリー総合型選抜が、公募型選抜には一般学校推薦型選抜が、特別選抜には指定校推薦型選抜、併設高校推薦型選抜などがある。一般選抜はA日程、B日程が、大学入学共通テスト利用選抜においても前期募集と後期募集(後期は3科目型のみ)が整備されている。特に、指定校推薦型選抜の指定校は学科が選定することになっており、全国にわたって多様な高校を指定している。これら選抜制度により多様な高校生の確保を可能としている。また、合否判定には、一般選抜及び大学入学共通テストでは筆記試験の点数により、その他の選抜制度においては、学科独自で出題する小論文や学科教員で対応する面接あるいは口頭試問により適性を判断し、各試験終了後に開催する合否判定会議において結果を総合して評価し合否を判定している。このようにして公正な入学者選抜を実現している。	学生の受け入れの適切性については、各入試制度の終了後の学科での合否判定の際に点検を行っている。必要に応じて改善・向上に向けた取り組みを行っている。また毎年、大学主導のもと入試制度について点検と見直しを実施している。アドミッションポリシーについては、大学案内やホームページの更新の際に見直しを行っている。また、在学生の成績と併せて、個人面談を実施するなどして在学生の状況を把握し、入学制度別に整理することで、入学時の受け入れの適切性の評価につなげている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・多様な入試制度は、多くの受験機会を高校生に与えることになっている。	【長所】 ・なし
	【特色】 ・多様な入試制度を併用することは、入学後において資質や経験において多様な学生が共存することになり、在学期間中のみならず卒業後にも重要な、成長の場を提供することになる。 ・指定校推薦型選抜等で地方出身の学生を数多く入学させ、卒業後に地方で就職させる、ということは、まさに「人物を畑に還す」という本学のポリシーに則している。	【特色】 ・なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 多様な入試制度を併用することは、多様な学生が入学するということになるが、学力の差が大きい学生が入学してくる場合もあり、入学後の教育の負担が大きくなる。	【問題点】 ・入試は大学主導のもと実施されている。学科としては入試科目の中の選択科目の設定は任されているが、必須科目と選択科目を自由に指定できない。
	【課題】 入学後の教育についていける能力のある学生の質を入学者選抜で判定しなければならないが、一方で、志願者数の確保も重要であり、引き続き検討していかなければならない。	【課題】 ・学科の独自性を活かし、より多様な学生を確保するために学科あるいは学部独自で入試を実施するということも考えられる。
根拠資料名	募集人員（a2-①-1） 入試制度別受験者数の推移（a2-①-2） 評価結果(一般学校推薦)（a2-①-3）	満足度調査結果（a2-②-1）

3. 教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ つなげている ☐ 一部つなげている ☐ つなげていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	農業土木学系 2 分野と農業機械学系 1 分野、それに広域情報系 1 分野の計 4 分野で、さらに各分野は 2 つの研究室で構成されている。各研究室には複数名の教員を配置するようにしている。	8 研究室には 2 名ずつの教員を適切に配置していることで、各分野・各研究室の教育・研究活動を網羅的に実行している。現在、学科教員数を 1 名削減するようにとの指示に従い、常勤教員が 1 名となっている研究室があるため、嘱託助教を採用し支障がないようにしている。新しい学科教員数に対応するため2024年度以降は新体制へと変更することが認められている。	教員の欠員が生じる場合には、直ちに適切な教員構成となるよう人事計画を策定し実行している。募集は公募で行い採用については大学規定のルールのもと行っている。昇格については毎年、研究業績・教育・管理業務等の実績調査を該当者に実施し、学科の基準を満たした者については学科教授会の推薦により昇格できるようにしている。	大学の制度である依命留学は、毎年候補者を検討している。教育に関して、教育改善委員会、教育点検委員会、技術者教育検討委員会、非常勤講師懇談会、教育システム評価委員会等を組織しており、また私情協から情報提供を受ける FD 実施への参加を促したり、さらに研究に関して、大学が実施する科研費応募のための申請書作成の講習会への参加を促したり、全分野にわたる学生の卒論発表会に参加してもらい幅広い研究に触れる機会の増加を図ったりするなどして資質の向上・改善につなげている。	教員組織の適切性は毎週 1 回開催される教員会・教育改善委員会で、また定期的に開催されるその他の各委員会において点検・評価されている。2022 年度の教員組織には問題がなかったことから、改善・向上に向けた各教員の資質向上へ向けた取り組みを継続して実施していくことにした。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・なし	【長所】 ・幅広い教育・研究活動を実現できている。	【長所】 ・透明性の高い人事を実現できている。	【長所】 ・幅広い議論の場、情報交換の場を設けている。	【長所】 ・毎週 1 回全員参加の会議を開催していることで、迅速な対応が可能である
	【特色】 ・なし	【特色】 ・所属学生を均等に配分することで、各教員の教育上の負担が均等になるようにしている。	【特色】 ・本学では職階毎の人事枠の規定はないので、点数化された基準を満たせば昇格できるようになっている。	【特色】 ・技術者教育機関として外部(JABEE)から認定されるほど多様な教員の質の向上策及び教員組織の改善策を実行している。	【特色】 ・学外(卒業生や技術士)からの評価を取り入れる仕組みを有している。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・今後、現在より少ない教員組織へと移行しなければならない。	【問題点】 ・学生の所属を均等にすることで、学生の要望を十分に取り入れた教育上の体制となっていない場合がある。	【問題点】 ・昇格者の増加により、従来、助教等が行っていた業務を准教授・教授となっても担当してもらわなければならない。	【問題点】 ・多数の委員会が存在しており、会議のために多くの時間をさかなければならない。	【問題点】 ・学外者からの組織の評価と高校生の興味は一致しないので、入学志願者の増加につながらない。
	【課題】 ・少ない教員数で実効性の高い方針を検討し、明示していかなければならない。	【課題】 ・ディプロマ・ポリシーと学生の要望の整合を図りつつ、教員組織の編成について検討していかなければならない。	【課題】 ・職階で業務を限定しないようにする。	【課題】 ・会議は少なくして実効性の高いものにしていく必要がある。	【課題】 ・社会のニーズと多くの高校生の興味との整合を図るべく広報活動が必要である。
根拠資料名	教員組織の方針と編成 (a3-①-1)	教員組織の方針と編成 (a3-①-1)	昇格に関する業績等調査依頼・回答書 (a3-③-1)	各種委員会名簿 (a3-④-1)	教育改善委員会議事録一覧 (a3-⑤-1) 教育システム点検委員会議事録 (a3-⑤-2)

学部 地域環境科学部

学部長 大林宏也

学科名 造園科学科 國井洋一

1. 教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 （☑を記入）	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 講じている ☐ 一部講じている ☐ 講じていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に 対する 現状説明	基礎的な科目から、より専門的な環境計画・設計分野、ランドスケープ資源・植物分野、景観建設・技術分野の3分野に至る科目および専門科目を総合化する科目を配当し、これに従い教育を行っている。具体的には以下の（1）～（5）の5つである。 （1） 地域環境を構成する植物、土、水の基本要素にかかわる基礎教育、地域環境問題に関する見方や地域環境科学の学習への動機づけ、造園を学ぶために必要な感性を引き出すことをねらいとする基礎科目として、「造園科学概論」、「造園体験演習」などを配当 （2） 造園学における計画や設計に関わる基本理論と専門理論、造園空間創成のための手法論を修得する環境計画・設計分野の専門科目として、「造園計画学」、「近代造園史」などを配当 （3） 生物や生態に関わる基礎知識、造園植物や造園植栽、緑地生態などに係わる基礎理論と専門理論、造園空間創成のための技術論などを修得するランドスケープ資源・植物分野の専門科目として、「植物の生活と活用」、「造園樹木学」などを配当 （4） 造園建設・施工に関わる基礎理論と専門理論、造園空間創成のための技術論などを修得する景観建設・技術分野の専門科目として、「造園工学基礎演習」、「測量学」などを配当 （5） 造園学を構成する3つの専門分野を統合し、造園学を横断的に理解しつつ、グループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワークを軸に学修を展開することにより、実践的・実務的な応用力を修得する総合化科目および学際領域科目として、「造園植栽演習」、「造園工学演習」、「専門特化演習（一）（二）」などを配当	造園科学科では、演習科目を中心に授業を行い、体験的かつ実践的な学習ができるようになっている。主な演習科目は次の通りである。 造園体験演習 環境デザイン基礎演習 花・緑演習 CAD 及び GIS 基礎演習 造園工学演習 造園植栽演習 造園総合演習 専攻研究 専門特化演習（一） 専門特化演習（二）	全教員がシラバスにおいて成績評価基準を示し、評価した試験解答や演習課題の返却を行っている。その裏付けとして「授業のファイル」を作成し、保管・点検を行っている。教員相互、あるいは第3者（日本技術者教育認定機構 JABEE 審査員）等に成績評価、単位認定及び学位授与が適切に運用されているかが確認できるようにしている。	造園科学科は、ランドスケープの専門家すなわちみどり環境の創造と保全を担うスペシャリストとして、人間と自然の共生した空間や環境の実現のため、8項目の能力についてあげている。具体的には、次の通りである。（1） 地域レベルから地球レベル、ならびに地域社会から国際社会に至る幅広い視点から造園学を捉え、その沿革、社会的使命、将来の目標や課題を理解し、その発展に貢献できる能力を身につけている。（2） 社会に対して造園家としての使命感と責任をもって取り組める能力を身につけている。（3） 幅広い造園学の対象領域とそれらを司る原理や、造園空間の特徴、構成要素、自然のシステム、社会や経済のシステム、情報などを理解し、造園学を学ぶための基礎能力を身につけている。（4） 造園家として必要な言語、図面等による表現能力、コミュニケーション能力を身につけている。（5） 造園空間創成に向けて問題や課題を調査・分析し、それらの解決手段の総合化技術とその具現化手法であるデザイン技術を身につけている。（6） 造園空間の創成に必要な植物について、その種類、生理生	造園科学科の授業科目は、第三者機関である日本技術者教育認定機構（JABEE）による認定を基本とししている。本年は特に2021年10月11日に日本技術者教育認定機構（JABEE）による審査が行われた。また点検評価のため、学生による授業評価、卒業生からの意見集約、定期的な学科教員会の他、非常勤講師・客員教授へのヒアリング調査を通して、授業担当者間において相互理解を図るとともに、現状認識と点検評価、改善の方向の検討を行っている。

				態，美観的特性を理解し，植栽から育成管理に至るまでの技術と手法を身につけている。（7）造園空間を創成するための工学的知識，計測技術，建設・施工にかかわる具体的手法を身につけている。 （8）多様な主体との協働・連携により課題解決に取り組める能力を身につけている。（9）プロジェクトを計画的・組織的に推進する実務的・実践的な能力を身につけている。	
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 ①「環境計画・設計分野」，「ランドスケープ資源・植物分野」，「景観建設・技術分野」の3 分野の専門科目を基幹とした構成，②上記3 分野の専門科目の分野横断・総合化的科目の講義・実習・演習と基礎と体験的学習科目から応用・将来の進路，実社会のニーズに即した専門科目の選択が可能な秩序を持った段階的な構成に加え，③地域環境科学部の学部共通科目などと連動した複合的・総合的なカリキュラム構成をとることにより，先鋭化をはかっている。	【長所】 体験型の演習を行うことによって学生は理論的な学習のみを行うだけでなく，感覚的な能力も高めることができる。	【長所】 「授業のファイル」の作成・提出により，授業シラバスの 15 回の定期的点検，成績評価，単位認定及び学位授与を適切に行っているかを教員相互,あるいは第3者（日本技術者教育認定機構 JABEE 審査員）等が点検できる。	【長所】 学生自身が授業科目における目標達成度を十分に理解できるように，成績評価の基準を明示するとともに，答案やレポートの返却を行っている。また，前期・後期の学年ガイダンス時には，各学生による「学習教育到達チェック」を実施し，達成度に応じた学生への学習指導を行っている。また造園科学科 JABEE ワーキング「授業のファイル」の作成・点検を通じ，成績評価，単位認定及び学位授与が適切に運用されているかを確認できる。	【長所】 第三者機関の審査（日本技術者教育認定機構 JABEE）により学外からの客観的な評価が行われ，科内会議等で点検，問題がある場合の改善について議論できた。また年度末に非常勤講師・客員教授へのヒアリング調査を実施し，学科の教育課程及びその内容，方法の適切性や社会のニーズとの関連性などを学科教員が認識でき，点検評価，改善の方向性の検討を相互に実施できる。
	【特色】 第三者機関の審査（日本技術者教育認定機構 JABEE）に耐えうる教育体制としている。	【特色】 リモート授業（遠隔授業）が社会的に進められている中，生物のうちの人として最も大切な五感を鍛えることができる。	【特色】 第三者機関の審査（日本技術者教育認定機構 JABEE）に耐えうる教育体制としている。	【特色】 第三者機関の審査（日本技術者教育認定機構 JABEE）に耐えうる教育体制としている。	【特色】 ・第三者機関の審査（日本技術者教育認定機構 JABEE）に耐えうる教育体制としている。
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 自然科学と社会科学，芸術との接点，その関係を結びつける総合化の難しさ，一方で社会の各分野の専門化への対応，追従に課題が残る。	【問題点】 学習者と教育者の齟齬が生じないようにする。	【問題点】 造園科学科以外の教員や非常勤講師への「授業のファイル」作成・配布と回収業務に多くの時間を費やす必要性があった。JABEE コースの選択性を再検討した結果，関連書類の収集方法の指導を徹底する。	【問題点】 履修モデルに即した体系化の必要性和その内容の検討，周知方法について検討する。	【問題点】 効率的な点検作業を目指す。
根拠資料名	https://www.nodai.ac.jp/application/files/6914/9068/1064/3policy2017_land.pdf	2022 造園科学科指針 p19-27		https://www.nodai.ac.jp/application/files/6914/9068/1064/3policy2017_land.pdf	プログラム点検書（実地審査後）（2021 年 10 月 11 日 JABEE 審査結果）

2. 学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している	☒ 行っている
点検項目に 対する 現状説明	6 月、8 月に実施されたオープンキャンパス、2、3 月に実施された合格者説明会などを通じ、入試に関する説明会を行い、学生募集の機会と学科の内容を周知できるように努めてきた。 入試制度は、センター試験利用型入試、一般入試の他に多様な推薦・優先入試などがある。 造園科学科では、教育・研究・就職等の特徴を考え、首都圏のみならず地方の高校、農業系高校からも学生を採用すべく継続的な議論を実施している。推薦・優先入試における入学者の選抜においては、小論文、口頭試問の内容を検討し、学科教員を可能な限り分野や職階の異なる編成により、面接などを実施している。本年度は特に、合格者説明会を行い、本学科をより深く理解して入学できる体制を築いた。	推薦入試においては、面接時に造園科学科のアドミッションポリシーの理解度の確認を行い、ディプロマポリシーとの相違がないかを確認している。 一般入試に関しては、大学ホームページや大学案内に加え、オープンキャンパスに伴い学科案内の誌面の見直しを行い、写真やイラストなどを多く採用し、造園科学科の取り扱う領域を今まで以上にビジュアルで理解できるように改めるなど、改善・向上に向けた取り組みを行なった。また大学 HP の造園科学科のオリジナルサイトの改定につとめた。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 卒業生は主として造園界（公務員、中学理科教員、高校農業科教員、造園計画・設計事務所、造園建設系企業、住宅関連企業、ナーセリー、生花関連企業など）への就職の他、本学大学院造園学専攻などへの進学に進路を求める者も少なくなく、進路は広域な造園界の全ての職域にわたっており、社会においては造園技術者の中核として活躍するなど、本学科の入試成果が有効に活用されていることを裏付けていると思われる。	【長所】 多くの入試制度が異なる時期に実施されることは、受験生確保の点からも意義は大きい。
	【特色】 センター試験利用型入試、一般入試、各種推薦・優先入試など、多様な入試制度と各地域から学生を確保することで多様な人材が確保できる。	【特色】 HP 及び学科案内の誌面の見直しを行い、写真やイラストなどを多く採用し、造園科学科の取り扱う領域を今まで以上にビジュアル化したことで、造園が取り扱う領域の広がりが受験生に具体的に理解できるようになった。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 様々な入試制度で多様な人材が確保できる反面、学力のバラつきが少なくなく、学生のレベル設定をどこに重点を置くかが困難となっている。	【問題点】 造園学の独自性に対して興味をもてるような紹介が必要な一方、将来プロフェッショナルとして修学すべくカリキュラム内容に対する嫌悪感の乖離が起きている。
	【課題】 造園科学科の魅力の周知と地域創成科学科との相違点が説明できるようにする。	【課題】 学習意欲が減退している学生が近年増加傾向にあ、その結果、不登校や・休学・退学する学生がおり、その対応に費やす時間と対応の仕方に苦慮している。
根拠資料名	造園資料⑩2023 年度大学案内 https://www.nodai.ac.jp/guidebook/univ2023/	造園資料⑫2022 年度造園科学科指針 造園資料⑬2023 年度大学案内 https://www.nodai.ac.jp/guidebook/univ2023/

3. 教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集, 採用, 昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☑している	☑している	☑行っている	☑ 一部つなげている	☑ 一部行っている
点検項目に対する 現状説明	学生数の減少などに伴い、時代に合わせた体制にするように、専門分野ごとに適切な人材が配置されるように議論した。	学科教員の補充, 昇格を実施し、教員組織の充実をはかった。また 5 研究室体制（1 研究室 3 人の教員）にした。関係部署（教授会）より承認され、2021 年度より実施した。	新規助教の採用申請を行い、承認を得た。また 1 名の教員の昇格申請の承認を得て、造園科学科を構成する 3 分野の教員組織の充実を図った。	異なる専門分野の人員配置についてはバラツキがあったが、教員の新規採用, 昇格の実施に伴い教員組織の改善につなげる努力を継続的に検討してきた。	大学院新研究科設置に関連する昇格人事を行い、より適切な組織体制の維持・構築に向けて検討を行っている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 複合的な専門指導体制が構築できる。	【長所】 学科における教員編制が充実する。	【長所】 より高度な研究・教育者の採用, 昇格に伴い教育研究活動を展開することが可能となる。	【長所】 今後の検討で組織の充実・改善にも適切な対応が可能である。	【長所】 2019 年度 4 月採用, 及び昇格が実施され、学科における教員編制が充実する。
	【特色】 専門性の異なる人材の配置で多様な教育・研究体制を構築可能である。	【特色】 新たな教員確保に伴い、学科教育の充実が図れる。	【特色】 優秀な教員の採用, 昇格に伴い学科内の教育研究活動が活性化される。	【特色】 継続的な指導体制を整えることができる。	【特色】 現状における人材確保の予定分野が明確である。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 今後学科内の教員数を十分に確保することが困難な場合が想定される。	【問題点】 今後定年を迎える教員が連続し、学科内の教員数と年齢構成の階層を十分に検する必要性が認められる。	【問題点】 研究環境の問題から昇格に必要な条件を十分に確保できない教員への支援体制が必要なこと。	【問題点】 今後、教員の数と時期を適切に考え、組織の充実・改善を検討する必要性がある。	【問題点】 特になし
	【課題】 教員確保に向けた、研究環境の充実を図る必要がある。	【課題】 教員確保に向けた研究内容の充実を図る必要がある。	【課題】 昇格に伴う業績確保に向けた研究環境の充実を図る必要性と共に、新たな研究内容の体制を、各研究室で構築する必要性が考えられる。	【課題】 大学院組織と連携した今後の人事体制を構築できるようにする検討が必要である。 また年齢構成上の問題がみられるのでその解決の検討を要する。	【課題】 大学院組織と連携した今後の人事体制を構築できるように検討を要する。
根拠資料名	造 園 資 料 ⑩ 2023 年 度 大 学 案 内 https://www.nodai.ac.jp/guidebook/univ2023/				

学部・研究科名地域環境科学部

学部長・研究科委員長名大林 宏也

学科名・専攻名地域創成科学科

1. 教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☐ 講じている ☒ 一部講じている ☐ 講じていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☐ している ☒ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	学科設置時に文科省に提出した「設置の趣旨等を記載した書類」および事前相談資料「③教育課程等の概要」、「⑤授業科目の概要」に記載したカリキュラムポリシーおよび授業等科目群にしたがって、教育課程を体系的に編成している。	実習科目と専門科目との関連性を説明し、必要に応じて講義資料等の見直しを指導している。また、実習科目では実習内容毎に資料を配付し、自主学習を促している。	シラバスに成績評価基準を明記し、それに従った評価および単位認定を行っている。卒業論文については評価について学科教員で情報を共有し、適切な指導がおこなわれているかを確認している。	ディプロマポリシーを考慮した履修モデルに基づいた科目履修を指導している。また、卒業論文などの総合的な科目において、低学年での学習成果についても確認をおこなっている。	教員全員が参加する教育点検委員会において教務関連事項について審議している。特に実習科目においては別途学科内委員会（実習検討委員会）を組織し、実習内容の検討を行っている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 1年次から「地域づくり」を意識した教育を実施している。	【長所】 シラバスに沿って実施しているため、長所や特色は特にない。	【長所】 シラバスに沿って実施しているため、長所や特色は特にない。	【長所】 実習等の機会を通じて、ポートフォリオの作成を指導している。	【長所】 実習科目の連関を意識した検討を行っている。
	【特色】 1年次から実習科目を前・後期に配置し、実践的教育を行っている。	【特色】 シラバスに沿って実施しているため、長所や特色は特にない。	【特色】 シラバスに沿って実施しているため、長所や特色は特にない。	【特色】 ディプロマポリシーを意識し、地域づくりに資する人材育成を行っている。	【特色】 1年次から実習科目を前・後期に配置し、実践的教育を行っている。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 新型コロナウイルス感染症の沈静化に伴い、実習内容の全般的な見直しを行う。	【問題点】 特になし	【問題点】 特になし	【問題点】 特になし	【問題点】 特になし
	【課題】 特になし	【課題】 特になし	【課題】 特になし	【課題】 卒業生アンケートなどを利用し、卒業時の学生の学生成果について把握する。	【課題】 特になし
根拠資料名	学生生活ハンドブック [カリキュラム] 教育研究上の目的・教育目標・3 ポリシー	シラバス [土と水の科学&フィールド実習（一）&地域環境論，測量学&測量実習]	シラバス [地域交流実習] 令和4年度 地域創成科学科 教員会議事録	履修のてびき 教育研究上の目的・教育目標・3 ポリシー	地域創成科学科 学内委員リスト

2. 学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	理系，文系を問わず，「地域づくり」に積極的に取り組める学生を募集し，様々な選抜試験を行っており，その結果を公表している。	入試選考会議は全教員が参加することとしており，学生の受け入れの適切性は担保されている。また，次年度（令和5年度）入試の定員数、受験科目についても、これまでのデータを元に協議した。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 一般入試，センター試験入試では，学内他学科に比べて，幅広い科目選択を可能としている。また，推薦入試では「地域づくり」を意識した小論文を課し，選抜を行っている。	【長所】 理系，文系を問わず，幅広い人材を募集している。
	【特色】 大学案内では，「地域づくり」をキーワードとした学科紹介を行い，アドミッションポリシーを意識させている。 大学 HP 上での動画公開，学科インスタグラムにより，広報活動を積極的に実施している。	【特色】 「地域づくり」に積極的に取り組める学生を募集している。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 特になし	【問題点】 特になし
	【課題】 特になし	【課題】 特になし
根拠資料名	大学案内 2022 [2023 年度入試制度] 教育研究上の目的・教育目標・3 ポリシー	令和4年度 地域創成科学科 学科会議議事録

3. 教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☐ つなげている ☒ 一部つなげている ☐ つなげていない	☐ 行っている ☒ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	大学及び本学部の教員組織の編制方針を踏まえるとともに、本学科の教育研究上の目的、教育目標及び3つの方針を十分理解し、それらに対応する能力と意欲を備えている教員を配置する、としている。	地域創成科学を構成する各々の学問領域において、優れた教育能力、研究能力を備え、地域創成科学の発展に貢献できる教員を配置している。	退職教員の後任人事を公募し、助教（任期付）の正式採用に至った。 准教授位以下の教員に対しては、定期的に業績調査を行い、学科教授会において審議している。	学科教授会が中心となり、海外留学の機会を通じた新たな研究シーズの発見、これまでの研究領域の応用展開が期待できる若手教員に対して、積極的に海外留学を認めている。来年度は准教授 1 名が依命国外留学の予定である。	退職予定者の後任人事案件が生じた場合、学科教授会において、単なる後任補充にとどまらず、学科の将来を見据えた教育研究分野の人材について審議し、枠取り申請ならびに教員公募の要件を設定している。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 教員組織の編制方針に記した通りであり、長所や特色は特にない。	【長所】 地域創成科学科の人材育成目標の達成と円滑な学科運営を重視している。	【長所】 年齢に関係なく、十分な業績を有し、学科運営に積極的な人材を昇格対象としている。	【長所】 1 研究室あたり 3 名の教員を配置し、留学教員不在時の支援体制を整えている。	【長所】 人事の固定化に陥ることなく、時代の要請に応じた適材適所の人材を確保することができる。
	【特色】 教員組織の編制方針に記した通りであり、長所や特色は特にない。	【特色】 「地域づくり」という幅広い研究領域に対応している。	【特色】 特になし	【特色】 実習は全教員が参加することで、留学教員不在時の支援体制を整えている。	【特色】 ・特になし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 特になし	【問題点】 特になし	【問題点】 特になし	【問題点】 特になし	【問題点】 ・特になし
	【課題】 特になし	【課題】 特になし	【課題】 大学院後期課程の設置に向け、定期的に業績チェックを行う必要がある。	【課題】 特になし	【課題】 ・特になし
根拠資料名	教員組織の編制方針 設置認可申請書・届出書「設置の趣旨等を記載した書類」 オ. 教員組織の編成の考え方及び特色	教員組織の編制方針 設置認可申請書・届出書「設置の趣旨等を記載した書類」 オ. 教員組織の編成の考え方及び特色	令和4年度 地域創成科学科 学科教授会議事録	入江淮教授（当時、現教授）留学申請書・同意書（平成 30 年度提示資料に同じ）	令和 4 年度 地域創成科学科 学科教授会議事録

学部・研究科名地域環境科学部

学部長・研究科委員長名大林 宏也

学科名・専攻名森林総合科学科

1. 教育に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	◎ カリキュラム改正 平成 30 年に実施した分野名変更、令和元年に実施したカリキュラム改正を踏まえて、カリキュラムの実施状況などの確認を行い、次期カリキュラム体制を整える。また、カリキュラムと関連した実習内容や担当についても確認、検討する。	◎ 卒業生の質保証 問題発見およびその問題解決能力、分かりやすく表現できる記述力やプレゼンテーション能力およびコミュニケーション能力などのスキルアップを図る。	◎ 大学院進学者の増加に向けた取り組み 入学定員の充足を図るべく、専門基礎能力の涵養に努め、新規研究領域の開拓や研究手法の開発に取り組む。
実行サイクル	___ 4 ___ 年サイクル（令和 2 年～ 令和 5 年）	___ 1 ___ 年サイクル（令和 4 年～ 年）	___ 1 ___ 年サイクル（令和 4 年～ 年）
実施 スケジュール	① 現行カリキュラム（講義、実習科目）の問題点・課題抽出. 現行の実習科目内容の問題点・課題抽出 ② 学科専門科目の科目、必修・選択の区分、内容、担当者、配当学年・学期などの見直し ③ カリキュラムツリーおよび履修モデルの作成. 学外（演習林等）実習科目の実施スケジュールの作成 ④ 履修モデル、および時間割の作成	研究室単位で行う 3 年生の専攻実験実習や 4 年生の卒業論文研究を通して、問題発見およびその問題解決能力、分かりやすく表現できる記述力、プレゼンテーション能力およびコミュニケーション能力などのスキルアップを図る。そのために、各研究室において課題研究発表や、卒業論文の所信表明、中間発表、成果報告会に取り組む。	専攻実験実習や卒業論文指導などを中心として、研究室活動の一層の充実を図る。具体的には、学生参加型のゼミの開催や学習成果の発表機会の確保、学外実習の充実などに取り組む。
目標達成を測定する指標	① 新カリキュラムにおける学科専門科目の確定 ② 新カリキュラムにおける実習科目の内容、スケジュール確定 ③ カリキュラムツリーの作成 ④ 履修モデルの作成 ⑤ 時間割の作成	① 専攻実験実習などにおける情報収集（文献調査など）やプレゼンテーションの評価 ② 卒業論文の所信、中間、成果発表会や、提出論文などに関する評価	① 専攻実験実習などにおける評価 ② 卒業論文の所信、中間、成果発表会、提出論文に関する評価 ③ 学外実習機会の確保状況の確認など
自己評価 （☑を記入）	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	コロナ禍の影響により、計画に目標として示した各項目については不十分な達成状況にあるが、一方で可能な限りの努力は継続しているため、引き続きの努力を重ねたい。	コロナ禍の影響により、計画に目標として示した各項目については不十分な達成状況にあるが、一方で可能な限りの努力は継続しているため、引き続きの努力を重ねたい。	コロナ禍の影響により、計画に目標として示した各項目については不十分な達成状況にあるが、一方で可能な限りの努力は継続しているため、引き続きの努力を重ねたい。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 コロナ禍の影響を受けつつも、オンライン会議等を重ねてきた。	【長所】 コロナ禍の影響を受けながらも、学生とのコミュニケーションを図った。	【長所】 コロナ禍の影響を受けながらも、大学院生の発表会等をオンラインで実施し、学部学生へも参加を呼びかける等の工夫を行った。
	【特色】 とくに無し。	【特色】 オンラインと対面の講義・ゼミ等を重ね、コロナ禍の影響を受けながらも、学生とのコミュニケーションを図り、目標の達成を目指した。	【特色】 とくに無し。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ポストコロナ・ウィズコロナにおける新たな対応が不十分。	【問題点】 ポストコロナ・ウィズコロナにおける新たな対応が不十分。	【問題点】 ポストコロナ・ウィズコロナにおける新たな対応が不十分。
	【課題】 次期カリキュラム改正を睨み、改善点の把握に努める。	【課題】 大学経営上求められる諸業務と教育業務のバランスを見直し、充実した教	【課題】 大学院の充実を図るとともに、大学院の魅力の発信にも努める。

		育環境の整備に努める。	
根拠資料名			

2. 研究に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	◎ 学内での連携による研究の推進 学科内、学部内、学内における研究交流の実現。	◎ 学外関係者との連携による研究の推進 学外における研究交流の実現。	
実行サイクル	<u> 2 </u> 年サイクル（令和3 年～ 令和4 年）	<u> 2 </u> 年サイクル（令和3 年～ 令和4 年）	<u> </u> 年サイクル（平成 年～ 年）
実施 スケジュール	単独研究あるいは同一専門内における研究に終始せず、学内他分野との連携強化を図り、共同研究の成果を論文などの形式により公表することを念頭に、初年度は研究内容の調整と研究計画の策定を実施。	学内における研究に終始せず、学外他分野との連携強化を図り、共同研究の成果を論文などの形式により公表することを念頭に、初年度は研究内容の調整と研究計画の策定を実施。	
目標達成を測定する指標	① 連携実績の確認 ② 研究計画策定の確認 ③ 成果公表（準備）の確認	① 連携実績の確認 ② 研究計画策定の確認 ③ 成果公表（準備）の確認	
自己評価 （☑を記入）	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☒ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☒ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	コロナ禍の影響により、連携については殆ど実現していない。	コロナ禍の影響により、連携については殆ど実現していない。	
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 なし。	【長所】 なし。	【長所】 ・
	【特色】 なし。	【特色】 なし。	【特色】 ・
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 状況の好転を期待しながらも、現在の状況が継続する場合の対応が後手後手に回らざるを得ない。	【問題点】 状況の好転を期待しながらも、現在の状況が継続する場合の対応が後手後手に回らざるを得ない。	【問題点】 ・
	【課題】 ・	【課題】 ・	【課題】 ・

根拠資料名			
-------	--	--	--

3. その他に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	◎ 学科 PR 活動の強化 受験生の増加、質の高い学生確保に向けた学科広報のあり方を検討し、高校へ出張講義や一般市民対象の講座など学内外において積極的な PR 活動を行う。また、学科パンフレットの見直しや学科関連の出版物刊行など PR 活動の充実を図る。	◎ 危機管理体制の改善・強化 学科内に既に設置してある「危機管理委員会」および「将来構想委員会」などの連携を強化し、各種ハラスメントおよび事故などの発生防止に努めるとともに、万が一の事案発生についてシミュレーションを行う。	◎卒業生（同窓会）との連携強化 同窓会組織等と連携し、相互に資する関係の強化を図り、学生の確保、卒業生の就業機会の確保に努める。また、同時に学科の社会貢献の一環として位置づける。
実行サイクル	3 年サイクル（令和2 年～ 令和4 年）	1 年サイクル（令和4 年～ 年）	1 年サイクル（令和4 年～ 年）
実施スケジュール	① 指定校を見直し、質の高い学生を確保 ② 高校へ出張講義などを増加、学科の PR ③ 全国の高等学校森林・林業教育関係者との連携を図り、大学・学部・学科の PR を行う ④ パンフレットなどの見直しを行う	① 危機管理委員会の開催 ② 将来構想委員会の開催 ③ 危機管理委員会および将来構想委員会の連携	① 学科教員の同窓会活動への参加 ② 同窓生による学科学生のための各種行事（講座など）の開催 ③ 卒業生名簿などの整備
目標達成を測定する指標	① 指定校の見直しを確認 ② 高校へ出張講義などの増加状況の確認 ③ 全国の高等学校森林・林業教育関係者との連携実態の確認 ④ パンフレットなどの見直し状況の確認	① 危機管理委員会の開催確認 ② 将来構想委員会の開催確認 ③ 危機管理委員会および将来構想委員会の連携状況の確認 ④ 学生の学内外における活動の規定・ガイドラインやマニュアルなどの整備（改定および新規作成）	① 学科教員の同窓会活動への参加状況の確認 ② 同窓生による学生のための各種行事の開催状況の確認 ③ 卒業生名簿の整備状況の確認
自己評価 （☑を記入）	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☒ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に対する現状説明	コロナ禍の影響により、新たな工夫等を盛り込むことができず、PR 活動の充実については、今後も継続した努力が必要。	「実施スケジュール」に示される各項目についてはほぼ実現したが、現下の状況に即応しうる体制の整備は不十分。	同窓会活動等の多くが中止となる中で、本目標については殆ど実現していない。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 なし。	【長所】 なし。	【長所】 なし。
	【特色】 なし。	【特色】 なし。	【特色】 なし。
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 大学あるいは学部のビジョンとの関連において、学科の特性を再確認し、PR 活動に臨むことが肝要であるが、不十分な達成状況にある。	【問題点】 きめの細かい目配りを行うことが困難な状況にあり、また学科内外の関係者との緊密な連携も困難である。	【問題点】 同窓会・卒業生等との連携を可能とする新たな手法を見いだし得ない。
	【課題】 大学・学部のビジョンを再確認・再認識しつつ、学科の魅力の掘り出しに努め、その成果を PR する。	【課題】 関係者との連携を強化し、ハラスメント等の発生防止に努める。	【課題】 新たな関係の構築方法を模索し、同窓会・卒業生等との連携の強化を図る。
根拠資料名			

学部名 地域環境科学部
学部長名 大林 宏也
学科名 生産環境工学科

1. 教育に関する総合的事項

	①	②	③	④
目 標	～ 数学補習 ～ プレイスメントテストによるリメディアル授業履修対象とならなかった1年生へ数学の補習授業を実施することによる学生の成績向上	GPA1.0以下の学生に対して個人面談を実施し履修状況を確認するとともに就学に関する相談に応ずることによる学習意欲の向上	全学生に対して個人面談を実施し履修状況を把握するとともに修学に関する相談に応ずることによる学習意欲の向上と学力向上への寄与	教員相互で授業視察を実施することによる教員の授業改善
実行サイクル	__2__年サイクル（令和3年～4年）	__2__年サイクル（令和3年～4年）	__2__年サイクル（令和3年～4年）	__2__年サイクル（令和3年～4年）
実施 スケジュール	・4月、プレイスメントテスト → 対象学生の選抜 ・前期、補習授業を実施 ・後期、効果測定 → 次年度へ	・5月、GPA1.0以下の学生の抽出 ・前期、個人面談の実施 ・後期、個人面談の実施 ・年度末、効果測定 → 次年度へ	・前期と後期、年2回の個人面談を実施 [1年生] 前後期、（面談担当班別） [2年生] 前期（面談担当班別）、後期（分野） [3年生] 前後期（研究室） [4年生] 前後期（卒論担当者）で実施	・前期、対象科目の選択 → 授業視察の実施 → 報告書の作成 ・後期、対象科目の選択 → 授業視察の実施 → 報告書の作成 ・次年度の授業への反映
目標達成を測定する指標	・前期必修科目「数学」の成績評価	・GPAの分布と推移 ・GPA1.0以下の学生数の推移	・学生カルテの作成実績 ・満足度調査での評価	・各授業科目における過去の評価と当該年度での改善箇所の公表
自己評価 （☑を記入）	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☒ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に対する 現状説明	理数系科目の基礎学力の低下が著しいため、平成30年度より数学の補講を学習支援として行っている。令和4年度は前期27名、後期28名を対象として各学期、研究室で分担し少人数クラスとなるようにして実施した。	目標③において面談は実施しているため、その際成績のことも把握しているので、この目標は取り下げることにした。	面談実施割合は、1年生前期79%、後期51%、2年生前期55%、後期29%、3年生46%、4年生22%であった。	平成29年度以前より教員相互に授業視察を実施している。令和4年度も昨年度と同じくコロナ禍の影響で授業視察は実施できなかった。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・基礎学力の向上を図り学力の差を小さくすることで、専門教育への導入を円滑にできる。 ・少人数できめ細かい教育が可能となる。	【長所】 （目標取り下げ）	【長所】 ・個々の学生の状況を詳細に把握することで、個別の指導を実現している。 ・学生のコミュニケーション能力の向上を図れる。 ・教育面のみならず、学生のメンタル面のケアも可能となる。	【長所】 ・他の教員の授業の実施状況を知ることにより、自身の授業改善に活用できる。
	【特色】 ・正規の授業ではない補習的な教育を行っている。	【特色】 （目標取り下げ）	【特色】 ・クラス担任制にとらわれず、より学生と接する機会の多い教員が面談を担当している。	【特色】 ・職階と無関係に、建設的な評価を行っている。 ・被評価者は評価結果を受け、必要であれば改善に向けて努力してもらうような仕組みにしている。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・正規の授業ではないので強制力が乏しい。 ・教員は労働過多になりがちで学生は学習時間確保が難しい。	【問題点】 （目標取り下げ）	【問題点】 ・教員は労働過多になる。 ・面談は行っているが、記録を残していない者が多いようなので、記録の記入を徹底する。	【問題点】 ・今年度は実行できなかった。 ・視察結果が次年度へ反映されているか確認する仕組みがない。

2022（令和4）年度 包括的な点検・評価報告書

様式2

	【課題】 ・学生のモチベーションの維持・向上を図る必要がある。	【課題】 (目標取り下げ)	【課題】 ・上級生になるほど実施割合は減少するが、実験の授業や卒論指導などで学生の状況は把握できる機会は少なからずあるので、負担を少なくして記録として残せるようなやり方を検討する。 ・面談の効果を学生指導に反映させる仕組みを構築する必要がある。	【課題】 ・視察の実効性の評価の検討が必要である。
根拠資料名	GPA の分布 (b1-①-1)	(目標取り下げ)	面談実施率 (b1-③-1)	実施しておらず資料なし

2. 研究に関する総合的事項

	①	②	③	④
目 標	～ 研究成果の公表 ～ 学会等での研究発表数（指導学生発表分を含む）の増加	～ 研究費獲得 ～ 外部資金への応募数及び獲得数の増加	～ 他機関との連携 ～ グローバル連携協定校、その他の学外機関等と実施する共同研究の増加	～ その他 ～ 研究の進捗・達成度・満足度の増進
実行サイクル	__2__年サイクル（令和3年～4年）	__2__年サイクル（令和3年～4年）	__2__年サイクル（令和3年～4年）	__2__年サイクル（令和3年～4年）
実施 スケジュール	・定期的に開催される学会等への参加あるいは学会発表の実施 ・年度末，効果測定 → 次年度へ	・9月，科研費への応募 ・令和4年4月，結果通知 ・その他の外部資金への応募 ・年度末，効果測定 → 次年度へ	・随時，グローバル連携協定校とのコロキウム実施 ・随時，学外機関との共同研究を実施 ・年度末，効果測定 → 次年度へ	・4月，調査を実施 ・年度末，効果測定 → 次年度へ
目標達成を測定する指標	・学会やシンポジウム等参加者数・学会発表者数の実績	・応募数と獲得数の実績	・グローバル連携協定の締結数の実績 ・共同研究数の実績	・研究に費やす時間数割合 ・自己評価
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☒ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に対する 現状説明	コロナ禍で他地域への移動が制限され学会参加が難しい中、研究発表数は口頭発表・ポスター発表数は18報であった。また投稿論文は27報であった。	科研費等の外部資金は4件獲得することができた。	学部での協定校とのコロキウムの主催回数は1，共同研究数は6，その他，学外機関との今日研究数は6であった。	業務の中で研究に費やす時間割合は1～6割，満足度は10～50点／100点であった。総じて低い傾向にあった。
現状説明を踏まえた 長所・特色	【長所】 ・他の研究者との議論を行う場に参加することで研究者としての資質の向上、研究へのモチベーションが確保できる。	【長所】 ・当該研究の必要性、意義などを第三者に評価される機会となる。 ・研究費がつくことで研究がやりやすくなる。	【長所】 ・学部グローバル連携の実績となる。 ・海外の研究者との研究交流を図れる。	【長所】 ・教員の研究に対する現状を再認識でき、研究意欲の維持を図れる。

2022（令和4）年度 包括的な点検・評価報告書

様式2

	【特色】 ・本大学から支給される研究費により学会等への会費の助成が受けられる。	【特色】 ・獲得のための説明会などが大学で開催されている。	【特色】 ・学部4学科で協定校の増加を図っている。	【特色】 ・目に見える形として現れにくい研究実績を評価している。
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 ・授業や学内諸行事と学会開催日とが重複する場合があります、学内業務を優先させなければならない状況にある。	【問題点】 ・応募する研究を実行に移す時間的余裕がない。	【問題点】 ・現地の状況が把握できていない。 ・日程調整が難しい。 ・リモートで実施したが、時差のため時間帯の設定が難しい。	【問題点】 ・根拠を示しにくい。
	【課題】 ・学会等出席のための出張のしやすい環境が必要。 ・研究論文作成に関する時間の確保が必要。	【課題】 ・研究に着手しやすい環境作りが必要。	【課題】 ・参加しやすい環境作りが難しい。 ・今後、提携先の大学を訪問し、直接会って議論する場があると良い。	【課題】 ・実績の根拠を示せるような方策が必要。
根拠資料名	学会発表・投稿論文数（b2-①）	外部資金獲得数（b2-②）	コロキウムの主催等の回数（b2-③）	充実度（b2-④）

3. その他に関する総合的事項

	①	②	③	④	⑤
目 標	～ 学科の組織再編 ～ 次回のカリキュラム改正に合わせた学科改組の実施	～ 入学者確保 ～ 入学者確保のための対策の立案・実行と多様な受験生の獲得	～ 学科広報と学生の研究力向上 ～ 大学祭文化学術展等を利用した学生の研究の公開による研究者意識の醸成とプレゼンテーション能力の向上	～ 就職支援 ～ 学科（課外活動組織）で企画する就職セミナーや業界研究会の開催、公務員試験対策講座の実施による専門性を活かした就職先への就職者数の増加	～学生のFD支援～ 学科の課外活動組織を利用した現地見学会の実施による学生の社会貢献のための資質の向上
実行サイクル	<u> 2 </u> 年サイクル（令和3年～4年）	<u> 2 </u> 年サイクル（令和3年～4年）	<u> 2 </u> 年サイクル（令和3年～4年）	<u> 2 </u> 年サイクル（令和3年～4年）	<u> 2 </u> 年サイクル（令和3年～4年）
実施スケジュール	・令和3年4月～ 分野・研究室・教員配置の検討、カリキュラムの確認 ・令和4年12月頃までには決定（全学審） ・その後、各種広報資料への掲載	・4月，対策を立案する ・随時，実行する ・年度末，効果測定 ・令和4年4月，効果測定	・4月～ 発表テーマの設定 ・前期，調査研究 ・11月頃，発表 ・年末，効果測定 → 次年度へ	・5月頃，就職セミナーの実施（主に4年生対象） ・11月頃，業界研究会の実施（主に3年生対象） ・11月～翌2月，公務員講座の実施 ・年度末，効果測定 → 次年度へ	・年1回程度，現地見学会の実施 ・年度末，効果測定 → 次年度へ
目標達成を測定する指標	・新体制の公表	・各種受験者数増加のための活動実績 ・受験制度別入学者数の割合	・発表の実績 ・来場者数／参加者数 ・自己評価	・就職セミナーや業界研究会の開催、公務員講座開講の実績 ・専門性を活かした就職先への就職率 ・公務員受験者数・合格者数・就職者数の実績	・現地見学会実施の実績 ・参加者の満足度
自己評価 （☑を記入）	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☒ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☒ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に	学科の新体制は議論中である。	高校への出張講義等10回実施した。指定	7研究室が文化学術展で発表を行った。	就職セミナーや業界研究会は依然，学科	現地見学会を1月に実施した。

2022（令和4）年度 包括的な点検・評価報告書

様式2

対する 現状説明		校として工業高校を増加させたことでわずかではあるが、工業高校出身者の合格者が増加した。		としての説明会等は開催しなかった。研究室レベルで企業等による説明会は6回実施した。 専門科目の公務員対策講座はオンラインで開講した。	
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・学科のPRにつながる	【長所】 ・受験者、入学者の獲得は重要な命題である。	【長所】 ・学生のプレゼンテーション能力の増進が期待できる。 ・学生の研究意欲の増進につながる。 ・学科のPRになる。	【長所】 ・学生の就職支援を行う。	【長所】 ・現場を知ること、学習・研究意欲の増進が期待できる。 ・見学受入先を就職先の候補として考えてくれる。
	【特色】 ・受験生獲得と社会の要望にみあう学科を構築できる。	【特色】 ・特になし	【特色】 ・全研究室で出展している。	【特色】 ・学科の専門色の濃い企画、学生のニーズを反映できる企画を実施できる。	【特色】 ・学科の専門色の濃い見学先を設定している。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・何人かの教員といくつかの研究室の意思が反映されないかもしれない。	【問題点】 ・受験生獲得と同時に、社会への人材の輩出という視点も忘れてはいけない。	【問題点】 ・事前にビデオを撮影しそれを流すという形式で発表を行った場合、聴講者の顔を見ながらプレゼンするという能力の増進が期待できない。	【問題点】 ・授業と重複しない日時に企画を設定するのが難しい。	【問題点】 ・授業と重複しない日時に企画を設定するのが難しい。
	【課題】 ・可能な限り全員の希望する形で、再編を実現する。	【課題】 ・社会が必要としている人材を丁寧に説明する機会を設ける必要がある。	【課題】 ・依然として入場者数が制限されていたので、通常の収穫祭に戻ることにより多くの来場者が得られ、説明機会の増加が期待できる。	【課題】 ・リモートでの開催が可能ならば積極的に利用し、回数を増やして実施することで、学生の参加の機会を確保できる。	【課題】 ・夏季休業中などで実施日を調整する。
根拠資料名	特になし	入試制度別受験者数の推移（a2-①-2） 活動実績（b3-②）	特になし	企業等説明会の開催実績（b3-④） 公務員講座案内（b3-④-2）	現地見学会案内（b3-⑤-1）

学部・研究科名	地域環境科学部
学部長	大林宏也
学科	造園科学科 國井洋一

1. 教育に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	都市環境から自然環境に至るまでの育成と保全に科学的かつ実践的に対応できる者を養成することを目標とする。	新たな環境を計画的，デザイン的に創成できる者を養成することを目 標とする。	技術と実践力をもって自然環境の利活用を生態技術的，環境芸術 的に処理できる者を養成することを目標とする。
実行サイクル	8 年サイクル（平成 2 9 年～ 3 7 年）（2017-2024）	8 年サイクル（平成 2 9 年～ 3 7 年）（2017-2024）	8 年サイクル（平成 2 9 年～ 3 7 年）（2017-2024）
実施 スケジュール	カリキュラムポリシーに基づき，学習目標を学生に周知して授業 を実施するとともに，レポート・試験を通して学生の学習目標達 成度の評価を行う。 JABEE 認定校としての要件を常に確認し，第三者の審査による 教育体制自己点検を含めた，技術者教育の確認を継続する。	カリキュラムポリシーに基づき，学習目標を学生に周知して授業を 実施するとともに，レポート・試験を通して学生の学習目標達成度 の評価を行う。 JABEE 認定校としての要件を常に確認し，第三者の審査による 教育体制自己点検を含めた，技術者教育の確認を継続する。	カリキュラムポリシーに基づき，学習目標を学生に周知して授業 を実施するとともに，レポート・試験を通して学生の学習目標達 成度の評価を行う。 JABEE 認定校としての要件を常に確認し，第三者の審査によ る教育体制自己点検を含めた，技術者教育の確認を継続する。ま た JABEE 認定のほか，「樹木医補」，「測量士補」，「自然再生士補」 の「資格認定」に対応したプログラム，所定の科目を履修，単位を 修得し，卒業後一定の実務経験を経て「受験資格」が与えられる「造 園施工管理技士（2 級）」，「土木施工管理技士（2 級）」も提供し， 学生の学習活性化強化も目指している。
目標達成を測 定する指標	授業シラバスの 15 回の定期的点検と教員相互の点検を実施する。 また，学生による授業評価と満足度評価を実施する。 日本技術者教育認定機構(JABEE)による教育点検を常に実施し， 点検，評価を実施する。	授業シラバスの 15 回の定期的点検と教員相互の点検を実施する。 また，学生による授業評価と満足度評価を実施する。 日本技術者教育認定機構(JABEE)による教育点検を常に実施し，点 検，評価を実施する。	授業シラバスの 15 回の定期的点検と教員相互の点検を実施す る。また，学生による授業評価と満足度評価を実施する。 日本技術者教育認定機構(JABEE)による教育点検を常に実施し， 点検，評価を実施する。
自己評価 (☑を記入)	☑達成した	☑達成した	☑達成した
目標に 対する 現状説明	学生自身が授業科目における目標達成度を十分に理解できるように， 成績評価の基準を明示するとともに，答案やレポートの返却を行って いる。2021年10月11日に行った第三者の日本技術者教育認定機構 (JABEE)審査後，学生による返却物の保存，目標達成度チェックの 方法を説明している。これはまた次回審査に向けての準備となってい る。	学生自身が授業科目における目標達成度を十分に理解できるように， 成績評価の基準を明示するとともに，答案やレポートの返却を行って いる。2021 年 10 月 11 日に行った第三者の日本技術者教育認定機 構(JABEE)審査後，学生による返却物の保存，目標達成度チェックの 方法を説明している。これはまた次回審査に向けての準備となってい る。	学生自身が授業科目における目標達成度を十分に理解できるよう に，成績評価の基準を明示するとともに，答案やレポートの返却を 行っている。2021 年 10 月 11 日に行った第三者の日本技術者教 育認定機構(JABEE)審査後，学生による返却物の保存，目標達成 度チェックの方法を説明している。これはまた次回審査に向けての 準備となっている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 第三者機関である日本技術者教育認定機構（JABEE）による認定を得 ており，自然科学と社会科学，芸術を包括した造園学の総合的かつ実 践的教育を目指すことが可能となる。	【長所】 第三者機関である日本技術者教育認定機構（JABEE）による認定を得て おり，自然科学と社会科学，芸術を包括した造園学の総合的かつ実践 的教育を目指すことが可能となる。	【長所】 第三者機関である日本技術者教育認定機構（JABEE）による認定を得 ており，自然科学と社会科学，芸術を包括した造園学の総合的かつ 実践的教育を目指すことが可能となる。
	【特色】 「授業のファイル」の作成・提出により，目標が適切に実施されて いるかが教員相互で点検することが可能となる。	【特色】 「授業のファイル」の作成・提出により，目標が適切に実施されて いるかが教員相互で点検することが可能となる。	【特色】 「授業のファイル」の作成・提出により，目標が適切に実施され ているかが教員相互で点検することが可能となる。
現状説明を 踏まえた	【問題点】 JABEE 認定の継続	【問題点】 JABEE 認定の継続	【問題点】 JABEE 認定の継続，「樹木医補」，「測量士補」，「自然再生士補」の

2022（令和 4）年度 包括的な点検・評価報告書

様式 2

問題点及び次 年度への課題			「資格認定」を受けた学生の卒業後の動向を把握する必要がある。
	【課題】 「授業のファイル」の作成・提出状況を確認し、今後問題点の抽出、 課題の検討が必要である。	【課題】 「授業のファイル」の作成・提出状況を確認し、今後問題点の抽出、 課題の検討が必要である。	【課題】 「授業のファイル」の作成・提出状況を確認し、今後問題点の抽 出、課題の検討が必要である。
根拠資料名	プログラム点検書（実地審査後）（2021 年 10 月 11 日 JABEE 審査結 果） 2022 造園科学科指針 p19-27, 29-37, 59-61	プログラム点検書（実地審査後）（2021 年 10 月 11 日 JABEE 審査結果） 2022 造園科学科指針 p19-27, 29-37, 59-61	プログラム点検書（実地審査後）（2021 年 10 月 11 日 JABEE 審査結 果） 2022 造園科学科指針 p19-27, 29-37, 59-61

2. 研究に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	造園科学の基本である植物、植生、そして自然を科学し、生物技術による環境創成を扱うことを目標とする。	地域らしさを常に考え、地域の環境計画と場のデザインに貢献する造園手法を追求することを目標とする。	造園科学が適用される空間を建設するエンジニアリング分野で、建設技術工学、建設施工管理の理論と実務を扱うことを目標とする。
実行サイクル	____ 8 ____ 年サイクル（平成 2 9 年～ 3 7 年）（2017-2024）	____ 8 ____ 年サイクル（平成 2 9 年～ 3 7 年）（2017-2024）	____ 8 ____ 年サイクル（平成 2 9 年～ 3 7 年）（2017-2024）
実施 スケジュール	日本造園学会、芝草学会、樹木医学会などの活動を行う。 国際学会等の活動を行う。	日本造園学会、都市計画学会、土木学会等学会などの活動を行う。 国際学会等の活動を行う。	日本造園学会、日本庭園学会、日本測量協会、日本写真測量学会などの活動を行う。国際学会等の活動を行う。
目標達成を測定する指標	学会誌への投稿、運営・参画、論文の発表、校閲、編集作業	学会誌への投稿、の運営・参画、論文の発表、校閲、編集作業	学会誌への投稿、運営・参画、論文の発表、校閲、編集作業
自己評価 （☑を記入）	☑一部達成した	☑一部達成した	☑一部達成した
目標に 対する 現状説明	国際学会誌の他、日本造園学会を中心とした関連学会活動や学会発表を行った。	日本造園学会などの主催による地域環境計画へ学生が参加し、教員がその指導にあたっている。	学部生・院生・教員による景観建設分野に関する研究が継続的に実施されている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 専門分野での研究の充実が図ることができる。	【長所】 専門分野での研究の充実が図れる。	【長所】 専門分野での研究の充実が図れる。
	【特色】 造園における植物分野の研究成果を社会へアピールすることが可能。	【特色】 コンペや学会主催の地域環境計画へ学生・教員が参加することで造園の社会性をアピールすることが可能となる。	【特色】 造園におけるエンジニアリング分野の新たな技術開発が可能となる。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 発表論文本数の不足。	【問題点】 発表論文本数の不足。	【問題点】 発表論文本数の不足。
	【課題】 深化している他分野とのバランスを図る。	【課題】 深化している他分野とのバランスを図る。	【課題】 深化している他分野とのバランスを図る。
根拠資料名	Norma G. Medina, Kojiro Suzuki, and Satoru Tanaka (2023) Response of native plant, <i>Ardisia pyramidalis</i> (Cav.) Pers. to alkaline soil condition for use in urban landscape in Manila City, Metro Manila, Philippines. Jour. Agri. Sci., Tokyo Nogyo Daigaku. Jan. 20, 2023 受理 Nanako Killmann, Norma G. Medina, Kako Matsunaga, Kojiro Suzuki, and Satoru Tanaka (2022) Relationship between the greenspace area and number of plant species in the urban area of Yokohama, Japan. Eco-Habitat 28, vol.1,5-18. Nanako Killmann, Fumitaka Nishino, Kojiro Suzuki and Ian D. Rotherham (2022) Characteristics of urban greenspaces based	Ryuki Tachikawa, Yoichi Kunii(2022) : Comprehensive quantitative understanding of the landscape using TLS point cloud data, Int. Arch. Photogramm. Remote Sens. Spatial Inf. Sci. XLIII(B2), pp.297-302 古賀大誠, 根岸尚代, 國井洋一 (2022) TLS 点群データを用いた戦災樹木に対する焼焦げの定量化手法と被災推定への応用, 日本測量協会応用測量論文集(33), pp.47-56 尹静一・福岡孝則・李玉紅ほか(2022)アジア・モンスーン地域におけるグリーンインフラの実態と枠組みに関する研究—上海黄浦地区を例として—,日本造園学会関東支部大会事例・研究報告集, p.117 TANG JIONGOYIN・福田理恩・陸 雨耕・謝定(2022)：日本造園学会	Pingxing Zhang(2022): The distribution and use of public religious spaces in the northeast of Kyoto City, Proceedings 13th International Symposium on Architectural Interchanges in Asia, 1104-1109. 張平星・渋澤孝行（2022）：荒川上流の礫種と秩父地方の地質の関係性 -石材教育の教材の提案-, 東京農業大学農学集報 67(3), 122-130. Murakami, K., Sugawara, M., Nagamine, D., Zhang, P. and Fukui, W. (2023): Anthropogenic stone walls are an important habitat for rare ferns and lycophytes in Japan, American Fern Journal 113(1), 28-42. 張平星・藤崎健一郎（2023）：鳥取県琴浦町「鳴り石の浜」の円

	on analysis of woody plants in Yokohama City, Japan. Landscape and Ecological Engineering Volume 18, issue 2. 221 – 238. doi.org/10.1007/s11355-021-00493-4	全国大会学生デザインコンペ佳作 野池優里花(2022)：日本財団 福祉の学生デザインコンペ佳作 Takanori Fukuoka（2022）：Toward Holistic Urban Green Infrastructure Implementation, Green Infrastructure and Climate Adaptation Chapter 15, Springer pp.239-255	礫が作り出した地域の風景，文化地質研究会第 6 回研究発表会・シンポジウム講演要旨集，15. 高須賀千鶴・張平星（2022）：チャートの石垣からみる犬山城の美観性の解析，2022 年度日本造園学会関東支部大会事例・研究報告集,42-43（優秀研究発表賞受賞）. Yasushi Suko, Tomoharu Shindo, Kaoru Saito, Norimasa Takayama, Shin'ichi Warisawa, Tetsuya Sakuma, Masaaki Ito, Pasi Kytölä, Tapio Nummi and Kalevi Korpela (2022), ”Alleviating Surgeons’ Stress through Listening to Natural Sounds in a Half-Encapsulated Rest Space after an Operation: A Pilot, Longitudinal Field Study”, International Journal of Environmental Research and Public Health 19(19):12736, DOI:10.3390/ijerph191912736
--	--	--	---

3. その他に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	海外研究機関や組織等との学術交流によるグローバル教育の推進：学部や学科の組織と海外の大学あるいは研究組織との学術連携により，交流を図る。	産・官・学の連携による実学教育の推進	地域連携による実践的な教育研究と社会貢献の推進
実行サイクル	____ 8 ____ 年サイクル（平成 2 9 年～ 3 7 年）（2017-2024）	____ 8 ____ 年サイクル（平成 2 9 年～ 3 7 年）（2017-2024）	____ 8 ____ 年サイクル（平成 2 9 年～ 3 7 年）（2017-2024）
実施 スケジュール	海外の研究者，技術者による特別講義開催，学術交流校等との共同プロジェクト研究等の実施によりグローバル社会への適応能力向上を図る。	産・官・学との連携により，実践的な演習・実習授業およびフィールドワークを通しての実務能力の向上を図る。	地域との連携により，実践的な研究プロジェクト等の実施による実務能力およびコミュニケーション能力の向上とともに，社会的意義の高揚を図る。
目標達成を測定する指標	学術交流にかかわる特別講義，特別授業，あるいは共同研究プロジェクト等の実施，教員や学生の海外留学・受入などによって評価する。また，それらの継続的交流のためのプログラムを作成する。	演習等における設定課題テーマの内容，課題成果の発表・講評を実施する。	各地域や造園業界で実践的に活躍する方々を招聘した講演会や特別プログラムの実施状況。
自己評価 （☑を記入）	☑達成した	☑一部達成した	☑一部達成した
目標に 対する 現状説明	English Program（英語による専門科目）として,Life history and application of Landscape plants と Planning and Design of Landscape Architecture の 2 教科を開講している	造園関連産業の第一線で活躍する非常勤講師を招聘した。世田谷区を対象とした造園総合演習（3 年後期）で行った講評会には世田谷区の関係者も招いた。	学生・地域住民を対象としたオープンカレッジ（農大サポート）を実施，本学卒業生を講師とした技術指導を実施した。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 英語による専門科目の修得	【長所】 学科独自の教育・特別プログラムの提供	【長所】 造園卒業生や組織との連携や地域連携が可能。
	【特色】 専門科目の英単語や考え方の修得ができる	【特色】 アクティブ・ラーニングと連動したプログラムとし位置づけができる。社会に対する学生目線の造園学のアピールが可能。造園伝統技術の継承	【特色】 地域連携や実践者による教育・研究の提示と社会貢献の推進。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 受入側の英語力の向上	【問題点】 特になし	【問題点】 平日での実施の可能性を探る
	【課題】 持続性	【課題】 特になし	【課題】 連携内容や社会貢献のアピール活動の強化。
根拠資料名	シラバス（Life history and application of Landscape plants 及び Planning and Design of Landscape Architecture）	造園総合演習シラバス	

学部・研究科名 地域環境科学部

学部長・研究科委員長名 大林 宏也

学科名・専攻名 地域創成科学科

1. 教育に関する総合的事項

	①
目 標	学科の目的である「水資源や食料生産，環境保全等の役割を担ってきた農山村地域の保全・再生，持続的発展など、地域の創成に貢献できる人材を輩出する」ため，学科のディプロマポリシーを学生に周知し，それに基づく教育を実践する。
実行サイクル	4 年サイクル（令和 4 年～ 令和 7 年）
実施 スケジュール	(1) 講義・実習・演習を通じて、都市農地を有する既成市街地の現状と課題に関する学びを深めさせる。(1～2 年次) (2) 地域との協働を通じて、その持続的発展に必要な技術と経験を身につけさせる。(2～3 年次) (3) 出口である就職先を意識させるとともに各研究室において専門的な教育・研究を実施する。(1～4 年次)
目標達成を測 定する指標	(1) フレッシュマンセミナーの実施記録 (2) 地域交流実習，フィールド実習(一)(二)の成果 (3) 総合実習(一)(二)の成果 (4) 卒業論文の成果
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	本年度は地域創成科学科の設立 6 年目にあたる。(1)(2)先述した教育に関する総合的事項の目標と実施スケジュールに基づき、農大の地元である世田谷区を中心とした実施計画を策定し、2 年次の総合実習(一)および総合実習(二)までの各種実習において、都市農地を有する既成市街地の現状と課題に関する学びを深めさせた。(3)出口である就職は、打ち続くコロナ禍の中にあって奮闘した創成第 1 期生、第 2 期生の実績をふまえ、第 3 期生に対しては 3 年次から十分に意識付けを行ってきた。研究活動では、調査、巡検、取材など野外活動に関するコロナ禍による制約を段階的に解除しつつ、専攻実験実習(一)（二）や研究室活動を通じて専門的な教育・研究を行った。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・様々な地域との連携実績があること、学生定員数が少ないこと、各教員の専門分野が多岐に及ぶこと、などを積極的に活用することによって、地域創成科学科ならではの教育が可能となる。
	【特色】 ・現地での作業・交流・調査に加えて、演習室での議論・取りまとめ・プレゼンテーションを実施することで、実践的かつ能動的な教育を行っている。一方、一昨年度、昨年度ほどではないにせよ、コロナ禍により Zoom を用いた遠隔対応とせざるを得ない場面も少なからず生じた。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・特になし
	【課題】 ・特になし
根拠資料名	・学科ホームページ、学科インスタグラム ・2022 フレッシュマンセミナースケジュール

2. 研究に関する総合的事項

	①
目 標	競争的研究資金等の積極的な導入により地域創成に関わる実学研究を推進させる。また，学会発表や学術論文，シンポジウム等を通じて，最新の研究成果を学外に積極的に発信する。
実行サイクル	____ 1 ____ 年サイクル（令和 4 年～ 令和 5 年）
実施 スケジュール	(1) 研究資金獲得：原則として教員全員が競争的研究資金に申請 (2) 研究成果発表：国内外の学会大会や学術雑誌等で研究成果公表 (3) 活動成果発信：学科 Web 等で活動成果を発信する
目標達成を測 定する指標	(1) 研究資金の申請・獲得状況 (2) 研究成果の公表状況 (3) 学科 Web 等での研究成果発信状況
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	学科内の教員を含め研究代表者または研究分担者として競争的研究資金への申請を積極的に行っている。各教員がそれぞれの専門分野において積極的に活動し、成果を公表している。個別具体的な研究成果については、自己点検評価の一環として大学の公式 HP に掲載されており、そちらを参照して頂きたい。また、平成 30 年度で終了した、大学戦略研究プロジェクト「伝統的農地管理による生物多様性ならびに国土保全の評価と持続的地域防災マネジメントの構築」の対象地（佐賀県みやき町、熊本県阿蘇等）において関連の深い教員が継続的に地域創成に関わる実学研究を行っている（一昨年度、昨年度に引き続いて今年度もコロナ禍のため、現地での活動は少なからず制限された）（根拠資料参照）。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・各教員の専門分野が多岐にわたる。
	【特色】 ・それぞれの専門分野を活かした研究を実施するとともに、戦略研究プロジェクトなどを通して、分野横断的な活動を行っている。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・特になし
	【課題】 ・特になし
根拠資料名	・平成 28 年度～平成 30 年度 東京農業大学 大学戦略研究プロジェクト研究課題「伝統的農地管理による生物多様性ならびに国土保全の評価と持続的地域防災マネジメントの構築」調査研究報告書 ・学科ホームページ、学科Instagram

3. その他に関する総合的事項

	①
目 標	様々な地域を対象とした「地域づくり」プログラムの実施
実行サイクル	<u>1</u> 年サイクル（令和 3 年～ 令和 4 年）
実施 スケジュール	(1) 学科教員が個人的に実施する地域連携プログラムを推奨・支援する。 (2) 学科として組織的に実施する地域連携プログラムへの参加を促し，学生への教育にフィードバックする。
目標達成を測 定する指標	(1) 地方自治体等と共同研究を推進するための補助金等の獲得状況 (2) オープンキャンパス等における活動成果の公表状況
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更コロナ禍の中にあっては
目標に 対する 現状説明	各教員の活動エリアは熊本県阿蘇地域、長野県小谷地域、佐賀県みやき町、福島県鮫川村、岩手県・宮城県沿岸地域など、多岐にわたっている。学科としては特に群馬県川場村との連携が盛んであるが、コロナ禍の中にあっては一昨年度、昨年度に引き続き、本年度も現地での学外実習を自粛した。なお、個人や研究室レベルでは行き来しており、学生に対してはポータルや講義・演習を通じて、これらの活動への積極的な参加を呼びかけており、行き先や活動内容に応じて数名～十数名程度の学生が参加している。活動成果の一部はパネル化し、オープンキャンパス等で一般に向けて公表した。さらに、学科 HP において、学科ニュース・研究室ニュース・学科ブログ・地域創成最前線(ポスター集)といった項目を立て、地域連携を含めた学科の活動内容を公表している。さらに今年度から学科インスタグラムを開始し、情報の逐次更新を精力的に行っている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・学科及び各教員の地域連携プログラムを積極的に奨励・支援することで、研究・教育活動を活性化している。
	【特色】 ・地域創成科学科の設立目的である「地域づくり」に向けて、実践的かつ科学的な活動を行っている。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・特になし
	【課題】 ・特になし
根拠資料名	・学科ホームページ、学科インスタグラム